

令和4年度第2回桑名市総合教育会議 議事要旨

| | |
|---------|---|
| 日 時・場 所 | 令和5年2月16日（木）午後1時～2時30分 桑名市役所 3階第2会議室 |
| 出 席 者 | 桑名市長 教育長 教育委員：3名 事務局：7名 |
| 議 事 次 第 | 1. 不登校児童生徒の社会的自立を促す支援の在り方について 2. その他 |
| 要 旨 | <p>1. 不登校児童生徒の社会的自立を促す支援の在り方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔は先生や親の言うことは絶対で学校には必ず行く必要があったが、今は学校に対する意識が変わってきている。先生が一方向的に教え、子どもにディスカッションさせて発表させるのは一部の子どもにとっては辛い。うまく自分を表現できない口下手な子どもは、休み時間はもちろんのこと授業中でも苦手なやり取りをしないといけないので、負担になるのではないかと心配になる。 ・コロナの休校と重なった子どもは生活リズムがつかみにくく影響を受けている。スマホやインターネットの所持率や利用率が高くなっているため、人と触れ合わなくても自分で完結できてしまう世界が広がっている。手を挙げて、声を挙げなければ、物事を考えていることに値しないような考え方をしてはならない。声を発しなくてもしっかり考えている子どもはいることから、会話以外でのコミュニケーション能力の評価の仕方も研究していく必要がある。 ・子ども達には親の気持ちの揺れがそのまま伝わることもあるので、子どもが学校に行けなくなった当初は当然パニックになることは仕方がないが、いかにそれを早く落ち着かせることができるかというのが、子どもが学校に行けるように戻る、エネルギーを蓄えることにつながるため、親に対する相談や支援の体制を充実していくと良い。 ・10年前と比較して文部科学省の調査による小・中学校不登校児童生徒人数は2倍程度に増加している。 ・教育研究所員による教育相談、臨床心理士による相談、匿名による電話相談、巡回相談、スクールソーシャルワーカーによる相談など10年前と比較して相談体制は充実しており、以前は申込件数が多く単発の相談でしか対応できない場合も多かったが、現在は複数回の相談に対応できるようになっている。 ・子どもが学校に行かなくなったことを親も受け入れて、行かなくてもそれはそれで良しとして、その子の生活のリズムが良くなるように接していれば、時間とともにエネルギーが溜まっていく。力づくで何かをするのではなく、子どもを見守ってあげることができればエネルギーが溜まり友達と話すのは楽しいと気持ちに変化していく。 ・子ども達が自分のいる場所が自分の居場所と感ずることができるように、大人や地域との信頼関係を築いていく必要がある。 ・オンラインの授業が増えている中で出席、欠席があまり関係なくなってきてお |

り、社会性の学習は別だと思いますが、学ぶことができるのであれば学校に行かなくてもよい部分もある。

・以前は学校を休むと授業が分からず学力を身に着けることができないという不安が大きかったが、今はタブレット等を活用して勉強は続けられるが社会的な関りをどのような形で身に着けていくかが課題である。

・学校に行かなければならないという考え方はそもそも必要なかと思います。子どもが将来を見越して今も自分がやりたいことがやれているか、やりたいことがあるのかということがすごく大事だと思いますので、保護者も教職員も頭を切り替えていくのは難しいですが、子どもに主導権を合わせることが非常に大事で学校に行くことが必ずしもベストではない。自分のやりたいことが自分の場所でやれたらいいですが、いずれは、ちょっと家から出て行って人と話してみようかなと思える人になってもらいたい。

・学習面においては学ぶ意欲があれば、リモート授業などである程度解消できる。これからの学校の役割として社会性を育てていくためには、社会が変わっていく中で、人が集まる場所を提供することが学校の大きな役割になっていくと考える。

・教員が子どもと関わる中で子どもに対する影響力は極めて大きいため、不登校児童生徒が出てきたときに担任の先生はクラスの生徒にどのように話しているのか。

・生徒指導協議会等で計画的に研修を重ねるとともに、不登校児童生徒の保護者との合意形成を図るために、丁寧な状況確認を行っている。また、当該児童生徒が教室に存在するというをきちんと意識しつつ、相手に寄り添い想いをしっかりと掴もうとする姿勢が大切。

・学校での先生自身の振る舞い、表情、声のトーン全てが教育ということを認識する必要がある。

・自己有用感や自己肯定感が低いことから、それらを高めることが必要である。

・例えば英語の授業の場合、文法が完璧にまとまった言葉で話すことだけを正解にするのではなくて、日本語を使わずにジェスチャーだけで内容が伝わり目的を達成したならそれも正解にするなど、自信を持たせることができれば自己有用感や自己肯定感が高まり不登校は減少すると考える。

・日本全体として相手の足りないところを指摘する傾向がある。悪いところを見たり人と違うところを言い合ってしまうのではなくて、相手の良いところを見つけて褒めることは非常に大切である。

・LGBTQの児童生徒は高い確率でいじめを受けたり不登校になったりしているという講演を聞いてショックを受けた。

・悪意はなくとも、発言や行動がいじめにつながったり、相手を深く傷つけてしまうことがあるため、いろんな機会を通じて調査研究を行うとともに謙虚な姿勢を持つことが必要である。

2. その他

事務局より、次回の予定について連絡

(以上)